

人の手を加えない自然のままの「万成石の墓碑」。「京都迎賓館の石庭」などを手がけている、日本を代表する石彫家の和泉正敏氏が制作



閑静な公園墓地の正面の奥にある永代供養墓「浄縁墓」



定期的に行なわれる仏教終活セミナー。この日は、ご住職の講話の後、「会葬礼状を生きている内に書いてみる」というテーマで行なわれた。みな真剣に取り組み、出来合いのものよりも自分で書いた方がよい、という意見が大半であった

「永代供養墓を用意すると決めた方が、それから安心して生きていけるように、その命を終える時まで、一緒に仏教の教えをお伝えしていきたいと思っています。お墓というのは、単に骨を置く場所ではないと思っています。お墓の契約と同時に永代供養墓「浄縁墓」が完成した。「私たちの霊園を信じて購入された方たちの願いにしっかりと応えたいと思ったのがきっかけです。かつては自分の親と子どもと3代でお参りに来る方も多かったのですが、両親が他界、子どもも独立し連れ合いも亡くなってお一人でお参りに来る方が増えてきました。お一人でお墓を守り続けるというのは大変な負担になります。こんな負担を子どもや孫に継承させるくらいなら、お墓など買わなければ良かった」という声がこの数年で多くなっています」

供養とは何か。お墓を守るとは何か。そして、「仏教を伝える場」としての寺の役割は何なのか。井上住職は考えた。そして行き着いたのが、大きな石に抱かれた「永代供養墓」の建立だったという。この特徴は、生前予約しか受けない点と、浄土真宗という宗派を前提としている点にある。

「永代供養墓を用意すると決めた方が、それから安心して生きていけるように、その命を終える時まで、一緒に仏教の教えをお伝えしていきたいと思っています。お墓というのは、単に骨を置く場所ではないと思っています。お墓の契約



豊かな「終わり」がもたらす安心感…… 従来の永代供養墓地の 価値観を変えていきたい

生前契約にこだわる永代供養墓がある。「仏教を伝える」という根本を大切にす
るゆえである。墓の名前は浄縁墓。浄土に行く時は、ともにこの墓に入るのだ
という縁。墓は単なる「骨置き場」ではない。浄土までの道のりにこそ、仏教
が果たすべき役割があると考える気骨の僧侶がいた。

「大きな命から生まれてきて、そして還
つていくのだと感じられる瞬間。例えば、
大自然の中に行くときと圧倒されて、思わず
『うわあ、すごいなあ』と、お天道様に
手を合わせてしまう、そんな感覚を大切
にしたかったのです」

東京都江戸川区にある真宗大谷派・證
大寺の井上城治住職は、永代供養墓「浄
縁墓」の大きな石を見上げてそう語った。

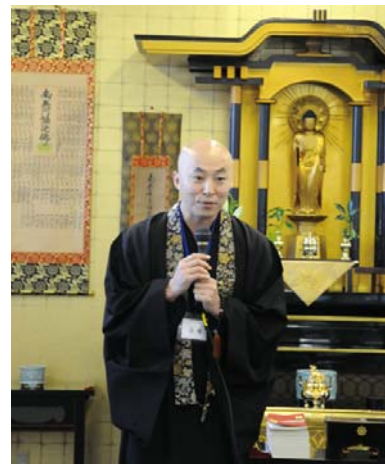


船橋市の「昭和浄苑」にある親鸞聖人像

ここは1200年の由来を持つ證大寺が
菩提寺として守り続けている墓地「船橋
昭和浄苑」。ズラリと並んだ墓石の一番
奥に、この「浄縁墓」が建立されたのは、
2013年8月のこと。

「石は地球から生まれ、長い年月をかけ
て砂となり土となり、植物を育てます。
植物も地中で圧縮されて石になる。石は
まさに命の循環そのものと、石彫家の和
泉正敏先生から教わりました。ですから、
石に文字や模様を刻むなど手を加える事
はしたくなかった。大きないのちの根源
である原石に触れることで自然と頭が下
がる場所にしたかったのです」と井上住

昭和浄苑



職は言う。思わず石に手を寄せると、ま
るで石に抱かれているかのような安心感。
太古からつながってきた命脈の一筋に自
分がお参り、還るべき場所が備えられてい
る。仏教の教えが、まさに今、自分に向
かって開かれていた。

永代供養墓を縁に よりよく生きる場所へ

證大寺が管理運営する「昭和浄苑」は、
森林公園（埼玉）と船橋（千葉）の2箇所
にある。いずれも30年続く、地域に根ざし
た霊園だ。この度、この二つの霊園におい



を縁として、例えば月に一度か年に一度でもお寺に来ていただき、一緒に死ぬ時までの心構えをしながら関わっていききたいのです」

宗派を大切にすることも、「仏教を伝える」という根本に立っているからだ。

「私たちは仏教終活を旗印に掲げています。それはお釈迦様が老病死という終活の問題に向かい、それを超えていく道を明らかにされたからです。この教えに自分身として向き合われた方が、宗派を開いた各宗の祖師なのです。たとえば日蓮宗ならば日蓮上人、曹洞宗ならば道元禪師が明らかにされた道を公開することが寺の役目なのです。お寺の運営する霊園は、お墓を販売して終わりではなく、お墓を縁としてその方がお墓に入るまで責任を持ち、お墓を縁として、これからのよりよく生きる人生観を提供したいのです。うちは浄土真宗ですから、親鸞聖人をお手本として、墓場に向かう人生ではなく、人生完成に向けた歩みを伝えたいのです」

浄土の縁をきつかけに 終わりへ向かう豊かさを共有

第七章のインタビューの発言にもある



森林公園の昭和浄苑にある永代供養墓「浄縁墓」。船橋と同様の自然の万成石を使っている(写真上)。「手で触れて、石の気持ちを感じて喜んでいただきたい」と石彫家の和泉氏。森林公園の高台にある公園墓地にこの墓碑が美しく調和している

ように、井上住職は広くお寺を開放し、仏教を伝える事に心を砕いている。

『浄縁墓』とは、その名の通り『浄土の縁』なのです。私も含め、みんな命が終わったら、このお墓に入るのだ、という縁。さらにはお墓の中に入るのではなく、明るい光明土であるお浄土へ生まれるのだという安心感を提供したいのです。

ですから、年に1回でもいいから、そういう縁を確かめるような場所を持ちましょう、お寺に来て下さい、と。

仏教を通して、例えばお母様に言われた事を思い出す。

そして、自分が死んだらお母様の元へ行くのだという安心感を得て、自分の生をもう一度捉え直す事ができる。『浄縁墓』を契約された方が仏教終活セミナーなどを通して親先祖の死生観を取り戻し、『死ぬのは怖くない』と仰ることを目の当たりにし『ああ、間に合って良かった』と思うわけです。

生前の契約にさせていただいているので、役目を果たすべきだからこそ、

単なる「墓守」ではない。文字通り人の「生き死に」、死ぬ事と生きる事の流に寄り添い、人の「終わり」を豊かな「始まり」に換えていく。仏教者としての強い信念が、「昭和浄苑」の真の永代供養の空間を作り出していた。